

2019年小屋作業

22期 黒崎 敏男

【日程】

①2019年春 5月11日(土)～12日(日)

②2019年秋 9月28日(土)～29日(日)

【参加者】

■OB (のべ15名)

(13期) 大島良治(春)、柴田茂樹(春)、
柴田訓子(春)、辰野隆義(春、秋)

(15期) 奥名正啓(秋)、上馬康生(秋)

(16期) 中野淳一(春)、北川隆次(春、秋)

(19期) 梅 典雅(春)

(20期) 久富象二(春、秋)

(22期) 黒崎敏男(春、秋)

■現役(3名)

(62期) 吉田優輝(春)

(63期) 楠大生(春)

(64期) 児玉大和(秋)



春の参加者(撮影 柴田セルフ)

【1】険しいアプローチ

春については、例年どおり山本さんのご厚意でボートを利用でき、また、難所の「へつり」についても補修がなされていたので特に困難はありませんでした。

ところが、秋作業の時点ではつり橋手前のがけの歩行にかなり注意する部分があったうえ、「へつり」も相当のバランス感覚が要求されるようなアスレチック遊具さながらの状態でした。

しかも秋の下見時には河原には道はなく、すすきのブッシュを漕いで「へつり」から30分かけて小屋に到着するという有様でした。これまで河原に小屋掛けをして過ごされていた方々がほとんど来られなくなったためと思われます。

秋の場合はダムから小屋まで最低2時間半かかるため、とにかく歩行だけでかなり疲労します。

【2】ニセアカシアの伐採

懸案だった小屋に倒れ掛かる可能性のあった枯れた大木の伐採ですが、春の作業でチェーンソーを使い伐採してロープをかけて倒そうとしたものの、上部で他の樹の枝に絡まっていたため完全に倒し切れませんでした。小屋に倒れ掛かる恐れはなくなったのでひとまず安心ではあります。



伐採の様子(撮影 中野)

【3】小屋周辺の整備

う回路のアプローチは春に梅さんが手入れし、秋にも草刈りを行って維持されています。「へつり」部分がいつ歩行不能になるかわからないため、この作業は毎回続けることになりそうです。

また、大島さんがホースの破損修理と小屋前の坂道の木段、ベンチなどを工作され、より快適に過ごせるようになりました。

毎回ホースの詰まりが起こるものの、たまっただろを排出すれば水量は確保できており、水洗トイレもこれまでどおりしっかり使えます。

【4】小屋内部の整備

床板の張替え、棚の修理といった維持に必須の作業は辰野さんと北川さんが中心となって今回も担当されました。これまでの継続的な作業によって建物としての機能は損なわれておらず、当分の間の使用に支障はないものと思われます。

これまでどおり炉も使え、周囲の壁が高温になるため水をかけながら冷やす手間はありますが、趣があって楽しいものです。夜の暗い中で、火を前にすると気持ちが落ち着くのは人間の原始的な本能でしょうか。

コンクリート壁の一部の穴の修復には相当の労力が必要なため、次回での対応となりました。

【5】高三郎登頂

春はコンディションが良かったので、柴田さん、中野さん、黒崎及び吉田君、楠君の両現役生の5名で登山を行いました。

朝4時30分薄暗い中を出発し、以後順調に歩を進め、約4時間のコースタイムで手前側のピークに到達しました。

栃倉分岐まではまったく問題なく、分岐から先は笹が復活してきたため若干歩きづらい面はあったものの全般的には問題なく、最後はいつもどおり雪の斜面をキックしながら到達しました。新道旧道合流地点から上には登山道上に横倒しになった枝があり、一部はのこぎりで伐採したものの歩行には大きな支障はありませんでした。

今回は特に柴田、中野の両先輩が無事に山頂に立たれ、約50年ぶりとのことだったため、大層感激していらっしやいました。お二人とも日頃から鍛錬されているたまもので、同行したこちらも嬉しい気分になりました。

当日の天候などもある上、誰にでもお勧めできるようなコースではないのですが、もし、最後に青春の思い出「高三郎」のピークを踏みたいとお気持ちのある方があれば次回以降お申しつけください。ペースメーカー役を承ります。

筆者自身は登りきった段階で両足がけいれんし、あとはだましまし下山するような始末だったうえ、下山中にトランシーバーを落とし、雪溪の下まで落下してしまったため回収を断念するという体たらくでした。

とにかく、この山についてはただの一度たりとも楽だと思った記憶はなく、今回も一筋縄ではいかないという思いを強くした次第でした。



高三郎ピーク（撮影 柴田セルフ）

秋については児玉君と黒崎が登山しましたが悪天のため1000m付近で引き返し、上馬さんは分岐手前までの草刈り作業に当たりました。

【6】今後の展望

栃倉分岐過ぎの1000m周辺の尾根がやや平坦になっている部分は笹などが復活しているため、再度草刈りを行うのが望ましい状況ですが、小屋からの日帰り作業でできるかどうか、要検討です。

そもそも、常に草木の刈り払いをしないかぎり登山道は維持できないわけで、いったいいつまでそれを行えるのか、将来の見通しがつきませんので、できるまでやってみてとしか言いようのない現状です。

また、小屋作業ももう少し補修を行うことで一段落させ、今後は特に何か作業するでもなく、おのおの時間を過ごしてもらえような楽しみ方、つまり「小屋酒場」として集って頂くようにできればとの思いもあります。

登山の部分でも述べましたが、我々だけでなくこれまで周辺で活動されてきた方々の状況を見るにつけ、そろそろこの山域での活動も限界に近くなっているようにも感じますので、自分たちが何とか活動を維持しているうちに、元気なOBOGの皆様にはせめて小屋の姿を見て頂ければ、携わっている者としては嬉しい限りです。

様々な制約がある中ですが、いつか再びこの山域が脚光を浴びる時が来ると信じ、できることは限られますが活動して行きたいと思えます。



秋の参加者（撮影 黒崎）

（追伸）

今年春に参加頂いた楠大生さん（2年生：63期）が現在、部長（主将）の任についておられます。